

研修報告書（長期研修・海外）・別紙：5．研修概要

研修者：板橋拓己（法学部教授）

研修者は、研究課題である「戦後ドイツのヨーロッパ統合政策に関する総合的研究」を遂行するため、2016年9月9日から2018年9月8日まで、客員研究員（Gastwissenschaftler）として、ケルン大学哲学部歴史学科（Historisches Institut, Philosophische Fakultät, Universität zu Köln）の歴史教授学・ヨーロッパ統合史講座（Abteilung für Didaktik der Geschichte und Geschichte der Europäischen Integration）に所属し、研究活動に従事した。以下に研修・研究の概要を記す。

1. 研究環境

研修者の受入教員は、ケルン大学歴史学科のヨーロッパ統合史講座教授でジャン・モネ・チェアアのユルゲン・エルヴァート（Jürgen Elvert）教授であった。エルヴァート教授はきわめて面倒見がよく、研修者に個室の研究室¹やデスクトップパソコンを提供してくれた。また、講座図書室の鍵も頂き、24時間図書室を利用できる環境を整えて頂いた。さらに、ケルン大学での研究活動の周知と透明化のために、研修者のプロフィールや研究業績などをケルン大学のウェブサイトに掲載して頂いた²。ケルン大学自体も、外国からの客員研究員の受入に慣れており、通勤（通学）定期や学食利用証などをすぐに作成してくれ、快適な研究環境を整えてくれた。

エルヴァート教授をリーダーとするケルン大学ヨーロッパ統合史講座の面々は、申請者を研究チームの一員として遇してくれた。エルヴァート夫妻をはじめ、このとき知遇を得た方々とは、現在も家族ぐるみで交流が続いている。

また、生活面についてだが、滞在最初の1か月（2016年9月）はボン大学のゲストハウス（Uni-Club Bonn）に滞在し、16年10月から18年9月までボン郊外のバート・ゴードスベルクにある一軒家のワンフロアを賃貸して暮らした。偶然ではあるが、賃貸した家の所有者であるMatthias Monzel氏は熱心なキリスト教民主主義者であり、（筆者の研究対象のひとつである）コンラート・アデナウアーを尊敬し、またメルケル首相の大ファンであった。モンツェル氏を通じ、ドイツにおけるキリスト教民主主義のミリューを体感できた経験は貴重なものであった。

なお（移民増加の影響で時間がかかったものの）2年間の滞在許可をボン市の外国人局から問題なく得ることができた。日本で必要書類を整えてくださった成蹊大学研究助成課のみなさまに御礼を申し上げたい。

2. ケルン大学ヨーロッパ統合史講座の研究プロジェクトへの参画

ケルン大学では、いくつかの講義と、受入教員であるエルヴァート教授の講義・演習を受講した。ここで受講したものを逐一挙げることはしないが、自分の研究で最も重要なのは、やはりエルヴァート教授との対話であった。とりわけ、毎週火曜日の昼（エルヴァート教授の講義を聴講

¹ ケルン大学の Hauptgebäude der Humanwissenschaftlichen Fakultät の部屋番号 1.16。

² <http://histsem2.phil-fak.uni-koeln.de/1692.html>

したのち)に、ヨーロッパ統合史講座の構成員全員で互いの研究状況などについて、ランチをとりつつ報告し合う Lagebesprechung が行われているが、研修者もこれに毎回参加し、大きな刺激を受けた。

また、こうした議論をきっかけに、研修者は、エルヴァート教授が主導する EU の共通安全保障・防衛政策に関する共同研究プロジェクトに参画した。その成果のひとつとして、2017年10月25-7日にハンブルクの連邦国防軍指導大学校 (Führungsakademie der Bundeswehr) で行われたランケ協会および連邦国防軍軍事史・社会科学センター共催のシンポジウム「„Bedingt einsatzbereit!“ Die gemeinsame Sicherheits- und Verteidigungspolitik der EU. Entwicklungen, Erkenntnisse und Perspektiven」で、「EU の共通安全保障・防衛政策と日本：協働の可能性 (GSVP und Japan: Möglichkeit der Zusammenarbeit)」と題する口頭報告を行った。この報告原稿を基にした論文は、ドイツ語の共著として刊行される予定である (拙稿は入稿済み)。

3. ドイツのヨーロッパ統合政策に関する研究

研修期間中、ドイツにおける最新の研究状況を把握するために二次文献を消化する時間もあつたし、また各文書館に赴き、一次資料を収集することができた。

とりわけ、ボンのザンクト・アウグスティンにあるコンラート・アデナウアー財団が管轄するキリスト教民主主義政治文書館 (ACDP) に頻繁に通い、そこに所蔵されているキリスト教民主同盟 (CDU) の政治家の個人文書を渉猟した。また、コブレンツの連邦文書館本館 (Bundesarchiv Koblenz) にも通い、そこに所蔵されている欧州経済共同体 (EEC) 初代委員長ヴァルター・ハルシュタインや三代目外相ゲルハルト・シュレーダーの個人文書などを収集した。いずれの文書館も、現在の自宅から公共交通機関で1時間ほどであり、ボンに居を構えたのは史料収集の面でも正解であつた。これらの史料分析をふまえ、ハルシュタインのヨーロッパ統合論の分析をはじめとして、いくつかの論文を著した (業績欄⑥)。

さらに、ベルリンの外務省政治文書館にもたびたび足を延ばし、ドイツ統一へといたるまでの西ドイツ外交史料を渉猟し、分析した。これはまだ研究途上だが、さしあたり2019年6月刊行の『年報政治学』に1本論文を寄稿することができた (業績欄⑭)。

1点、研修者にとって一つの誤算は、ヘルムート・シュミット [1974年から82年の西ドイツ首相] 関連文書が、同氏の死去に伴い、閲覧許可が一時停止されていることだった。とはいえ、そうした様々な史料状況を知ることができるのも、長期研修ならではのことである。

ちなみに、こうした文書館利用の経験談を、北海道大学の遠藤乾教授が主宰するヨーロッパ統合史研究ウェブサイトへ寄稿した (業績欄⑳)。

4. 現代ドイツ政治の研究

また、歴史研究に加えて、現地にいる利点を生かし、現代ドイツ・ヨーロッパ政治についても知見を深め、かつ積極的に日本のメディアに発信することにも努めた。とりわけ、2017年9月に実施された総選挙にまつわる諸問題について、政治学者として積極的にメディアで発言した

(たとえば『朝日新聞』2017年9月20日付朝刊のインタビュー、『日経新聞』2017年10月6日朝刊「経済教室」への寄稿など)。さらに、そうした現状分析をまとめ、論文や新書の一章としても公刊した(業績欄⑦⑩)。加えて、トランプ米大統領の登場とドイツの新政権発足がもたらしたドイツ外交の変化についても検討した(業績欄⑪)。

こうしたドイツ政治の分析をふまえて、「ポピュリズム」という政治現象の探究にも踏み出すこととなった。こちらはまだ研究途上だが、さしあたりプリンストン大学のヤン＝ヴェルナー・ミュラー教授による『ポピュリズムとは何か』という著作の翻訳作業などに従事した。

5. 成蹊大学での教育のまとめ・見直し

本研修中に、教科書『国際政治史』(小川浩之・青野利彦と共著)を有斐閣から2018年4月に刊行したことも記しておきたい。本書は、これまで研修者が成蹊大学法学部で担当してきた「国際政治史」の講義を基にしたものであり、長期研修を利用して纏めることができたのは幸いであった。この教科書をもとに、現在では講義を進めている。

以上が、研修者の長期研修の概要である。以下に、研修中および研修の成果として公表した研究業績の一覧を付す。

研修成果としての業績一覧

【図書】

- ①森井裕一(編)『ドイツの歴史を知るための50章』(エリア・スタディーズ151)明石書店、2016年(担当:「ヴァイマル共和国——『即興デモクラシー』のゆくえ」209-214頁、「分割占領下のドイツ——『零時』から分断へ」238-243頁、「基本法の制定と西ドイツの成立——『ボンはヴァイマルではない』」244-249頁)
- ②葛谷彩・西村邦行・小川浩之(編)『歴史のなかの国際秩序観——「アメリカの社会科学」を超えて』晃洋書房、2017年(担当:「アメリカの社会科学」とどう向き合うか——ドイツの国際関係論(IB)の挑戦」37-55頁)。
- ③山中仁美著、佐々木雄太監訳『戦争と戦争のはざままで——E・H・カーと世界大戦』ナカニシヤ出版、2017年(担当:「第3章『ドイツ問題』」、97-125頁)
- ④ヤン＝ヴェルナー・ミュラー著、板橋拓己訳『ポピュリズムとは何か』岩波書店、2017年、総176頁
- ⑤小川浩之・青野利彦・板橋拓己『国際政治史—主権国家体系のあゆみ』(有斐閣ストゥディア)、有斐閣、2018年(担当:第1章～第5章、13-101頁)
- ⑥網谷龍介・上原良子・中田瑞穂(編)『戦後民主主義の青写真——ヨーロッパにおける統合とデモクラシー』ナカニシヤ出版、2019年(担当:「第2章 ナチズム、戦争、アメリカ——初代欧州委員会委員長ハルシュタインの思想形成過程」59-85頁)
- ⑦成蹊大学法学部(編)『教養としての政治学入門』ちくま新書、2019年(担当:「第11章

変貌するドイツ政治」307-333頁)

- ⑧アンドレアス・ヴィルシングほか著、板橋拓己・小野寺拓也監訳『ナチズムは再来するのか？ 民主主義をめぐるヴァイマル共和国の教訓』慶應義塾大学出版会、2019年6月
- ⑨ヤン＝ヴェルナー・ミュラー著、田口晃・板橋拓己監訳『試される民主主義』上下巻、岩波書店、2019年

【論文】

- ⑩「変調するドイツ政治——難民危機とポピュリズムのなかで」『国際問題』第660号(2017年4月号)(焦点：苦悩する欧州)、2017年4月、15-24頁
- ⑪「「西側結合」の揺らぎ——現代ドイツ外交の苦悩」『アステイオン』第88号(特集：リベラルな国際秩序の終わり?)、2018年5月、97-111頁。
- ⑫「NATO「二重決定」の成立と西ドイツ—シュミット外交研究序説」『成蹊法学』第88号、2018年6月、341-368頁
- ⑬“The Past and Politics: Focusing on “Vergangenheitsbewältigung” in Post-War Germany,” *Japan Review*, Vol. 2, No. 1, Summer 2018, pp. 14-18.
- ⑭「「制約なき完全な主権」を求めて—統一ドイツ NATO 帰属問題とゲンシャー外交」『年報政治学』2019-I号、2019年6月(刊行予定)

【書評】

- ⑮「Book Review: それは民主主義の脅威なのか：国末憲人『ポピュリズム化する世界』(プレジデント社、2016年)」『外交』Vol. 40、2016年11月、140-143頁
- ⑯「Book Review: 「ドイツ・モデル」論を超えて和解の実像に迫る：武井彩佳『〈和解〉のリアルポリティクス——ドイツ人とユダヤ人』(みすず書房、2017年)」『外交』Vol. 42、2017年3月、140-143頁
- ⑰「書評：クリストファー・クラーク『夢遊病者たち——第一次世界大戦はいかにして始まったか』(1・2)(小原淳訳、みすず書房、2017年)」『日本経済新聞』(2017年4月22日朝刊)
- ⑱「書評：イヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかった祖父母の歴史——ある調査』(田所光男訳、名古屋大学出版会、2017年)」『日本経済新聞』(2017年9月30日朝刊)
- ⑲「Book Review: リベラルで民主的な憲法文化のために：ヤン＝ヴェルナー・ミュラー『憲法パトリオティズム』(斎藤一久・田畑真一・小池洋平監訳、法政大学出版局、2017年)、長谷部恭男・石田勇治『ナチスの「手口」と緊急事態条項』(集英社新書、2017年)」『外交』Vol. 46、2017年11月、140-143頁
- ⑳「書評：芦部彰『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策——1950年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策』(山川出版社、2016年)」『ドイツ研究』第52号、2018年3月、159-163頁

- ②① 「Book Review: ヨーロッパを揺るがす「記憶の政治」: 橋本伸也 (編著) 『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題——ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』 (ミネルヴァ書房、2017年) 『外交』 Vol. 48、2018年3月、142-145頁
- ②② 「書評: 鳩澤歩『鉄道人とナチス——ドイツ国鉄総裁ユリウス・ドルプミュラーの二十世紀』 (国書刊行会、2018年) 『日本経済新聞』 (2018年4月28日朝刊)
- ②③ 「Book Review: ポピュリズムとどう対話するか: カス・ミュデ+クリストバル・ロビラ・カルトワッセル『ポピュリズム——デモクラシーの友と敵』 (永井大輔+高山裕二訳、白水社、2018年)、庄司克宏『欧州ポピュリズム——EU分断は避けられるか』 (ちくま新書、2018年) 『外交』 Vol. 50、2018年7月、140-143頁。
- ②④ 「Book Review: 現代ヨーロッパにはびこる極右の思想と歴史を解明: フォルカー・ヴァイス著『ドイツの新右翼』 (長谷川晴生訳、新泉社、2019年) 『外交』 Vol. 54、2019年3月、140-143頁。

【その他】

- ②⑤ 「新しい「ドイツ問題」——ドイツとヨーロッパ統合の関係を歴史的に振り返る」 『学際』 第3号、2017年3月、28-39頁 (特集: 英国のジレンマ、EUの憂鬱)
- ②⑥ 解題「時代が生んだ奇書」 シュペングラー『西洋の没落 I』 村松剛訳、中公クラシックス、2017年6月、7-19頁
- ②⑦ 「権力と理想主義のはざままで——コール元ドイツ首相の死を悼む」 『外交』 Vol. 44、2017年7月、94-97頁
- ②⑧ 「(経済教室) ドイツ議会選後のEU」 日本経済新聞 (2017年10月6日朝刊)
- ②⑨ 「[史料館案内] キリスト教民主主義政治文書館の紹介」 (History of European Integration: 『ヨーロッパ統合史』のサポートサイト、2018年7月掲載)、URL: http://lex.juris.hokudai.ac.jp/history_of_european_integration/ACDP_detail.html
- ③⑩ 「メルケル」「左翼党」「ドイツのための選択肢」 『日本大百科全書 (ニッポニカ)』 小学館、2018年8月
- ③⑪ 「(経済教室) きしむ欧州 (中) ドイツ既存政党の埋没顕著」 日本経済新聞 (2018年12月28日朝刊)
- ③⑫ 「難民危機とポピュリズム: ドイツ政治の変貌」 および「パネルディスカッション: 『ポピュリズム化の時代にどう向き合うか』」 『松山大学地域研究ジャーナル』 第29号、2019年2月 (松山大学法学部創立30周年記念シンポジウム「ポピュリズム化の時代にどう向き合うか」)

【学会・研究会報告】

- ③⑬ 題目: 「GSVP und Japan: Möglichkeit der Zusammenarbeit」
学会: „Bedingt einsatzbereit!“ Die gemeinsame Sicherheits- und Verteidigungspolitik der EU.

Entwicklungen. Erkenntnisse und Perspektiven. Tagung der Ranke-Gesellschaft und des Zentrums für Militärgeschichte und Sozialwissenschaften der Bundeswehr.

年月：2017年10月27日

場所：Führungsakademie der Bundeswehr, Manfred-Wörner-Tagungszentrum, Hamburg

③④題目：「(コメント) 小シンポジウム「戦後ドイツの政治と司法—ナチ犯罪を中心に」」

学会：第28回西日本ドイツ現代史学会

年月：2018年3月30日

場所：岡山大学

③⑤題目：「ナチズム、戦争、アメリカ—初代欧州委員会委員長ハルシュタインの思想形成過程」

学会：日本国際政治学会 2018年度研究大会 部会2「キリスト教民主主義と欧州政治—歴史的な考察を踏まえての再検討」

年月：2018年11月2日

場所：大宮ソニックシティ

③⑥題目：「ドイツにおける右翼ポピュリスト政党の台頭とその歴史的意味」

学会：日本EU学会第39回研究大会 全体セッション第III部「ポピュリズムとリージョナル・アクターとしてのEU」

年月：2018年11月18日

場所：獨協大学

③⑦題目：「ポピュリズムと排外主義に揺れるヨーロッパ—ドイツから日本への示唆」

年月：2018年11月27日

場所：PARC 自由学校オープン講座

③⑧題目：「難民危機とポピュリズム—ドイツ政治の変貌」

学会：松山大学法学部創立30周年記念シンポジウム（論題「ポピュリズム化の時代にどう向き合うか」）

年月：2018年12月8日

場所：松山大学カルフルホール

③⑨題目：「(コメント) 大下理世「グスタフ・W・ハイネマン大統領と民主主義の伝統をめぐって—西ドイツの民主主義の発展と分断の克服をめぐる課題に着目して」」

学会：現代史研究会

年月：2019年4月14日

場所：早稲田大学・戸山キャンパス

司会：伊豆田俊輔（獨協大学）

④⑩題目：「統一ドイツ NATO 帰属問題とゲンシャール外交」

学会：世界政治研究会

年月：2019年4月19日

場所：東京大学弥生キャンパス

司会：石田憲（千葉大学）

討論：吉留公太（神奈川大学）

④題目：「アメリカの社会科学」とどう向き合うか—ドイツの国際関係論（IB）の挑戦」

学会：第61回駒場国際政治ワークショップ

年月：2019年4月25日

場所：東京大学駒場キャンパス

討論：高島亜紗子、藤田将史

以上

2019年5月9日

板橋拓己